

現代美術の海外発信に関する検討会(第3回)議事概要

1. 日 時 平成26年6月17日(金) 10:00~12:00

2. 場 所 文部科学省旧館 5F 文化庁特別会議室

3. 出席者

(委 員) 南條座長、逢坂委員、蔵屋委員、林委員、宮島委員、宮津委員、
山本(裕)委員

(文化庁) 青柳長官、川端文化部長、舟橋芸術文化課長、石垣支援推進室長、
眞住芸術文化調査官

4. 議事概要

(1) 「現代美術の海外発信について「論点の整理」(案)」に関する意見交換
事務局より、資料の1「現代美術の海外発信について「論点の整理」(案)」について説明があった。

座長より、本日は、「論点の整理(案)」の提言をより明確にするため、「第Ⅴ章」を中心に、長期・中短期目標について意見交換を行いたい旨発言があった。

(2) 今後のスケジュールについて

座長により、本日の意見交換を踏まえた本「論点の整理(案)」の修正については、座長と事務局に一任願いたいとの発言があり、了承された。

(3) 意見の概要

長期目標について

ア. 中核的施設の必要性

○ NEA(全米芸術基金)のような既存の施設をモデルにすることも良いが、それらに止まらず、収蔵庫の問題、アーカイブの問題とも関連付けた施設を日本が新しいモデルとして提供するという意識で検討すべきではないか。

- ヘッドクォーターとして、内容が充実した、象徴的な施設が必要ではないか。
- 海外の美術館では、コレクターが集まりネットワークを広げる場と機会があるが、我が国にはそのような場がない。そのような環境を創ることで、そこから海外発信も行われることになる。
- 国又は公的ヘッドクォーターを作ることが重要。作品や資料の所在情報等の提供、WEB サイト等の構築・発信、翻訳等を民間も含めて実施する施設が現実のものとなれば、国内のみならず、アジアの現代美術のハブとして機能できる可能性がある。ここで立ち遅れると、日本が孤立してしまう。国内のみではなく、アジアをも利用対象者として視野に入れていくべきである。
- 本格的に実施しようとするならば、全く別の、いわゆる戦略室が必要で、そこで新たな戦略を立てる必要があるのではないか。
- さまざまアーカイブの閲覧とともに、専門家が常駐し、情報を海外に発信させ、また、海外からの現代美術の調査研究や作品の貸与といったことにワンストップで応じることができる、中核施設・機関を作ることが長期目標とすべきである。
- 国際的な中核施設の設立は、国が優先して検討すべきである。美術館のコレクションの増加とか、収蔵作品の貸与といったことは既存の美術館も役割分担することが出来るが、国際的な発信拠点をどうやって作るべきかという問題は、国として検討すべきである。
- 中核施設の構想が立ち上がり、準備段階から作品や資料等の情報が把握していける状況があれば、現代美術振興のための中長期的な視点を持つことができると思う。
- 都内に戦略を練り美術館やギャラリー、個人をマッチングができる場所ができれば、様々な協議や検討もしやすい。そのような場が必要である。

イ. 中核的施設の役割

- ネットワークを繋げ、情報を集約する研究・情報センターのような場が重要である。
- 海外に発信するためには、「顔が見える人がいること」「拠点があること」「情報提供できるシステムが整っていること」が必要であり、この3つを文化庁側からどう提供できるかが鍵である。文化庁の中に、発信力を意識し、ネットワークを構築し、アーカイブ化に関して今までにない環境を整えることが可能となるような組織を作ることが適当だと思う。拠点を国がつくるべきである。
- 制作、販売、保存、展示、研究などの問題をマッチングするような人材がいる場所が今までなかった。出発点としては、専門性の高いそのような場を作ることが適切だと思う。
- 専門スタッフが少なくても、きちんとしたホームページを持っていることによっ

て海外研究者が多数来日しているセンターもある。日本はデータの整理がよくできている。美術の専門家と情報の専門の人たちが融合することで、日本の強みがだせると思う。

- 新しい施設の準備室を作るときは、アーカイブ整理チームと長期戦略構想チームを作り、意見を交換し会いながら発信していくことになるのではないか。また、活動を支援してくれそうな企業や個人の紹介業務も必要である。今はそれを個人レベルで行っている。これが実現すれば、海外からの評価も上がると思う。
- 大きな目標としては、中核的なセンターがあり、ここから海外に現代美術を発信するという具体的なミッションを持たせる。評論家、コレクター、研究者などの様々なネットワークをここに集約する。これをどのような形にするかを考える構想と戦略を作り実行させることが適当である。
- 構想室が中心となって参加者を限定してイベント等を行う。修復なら世界中から修復家を集めて議論してもらう。最初は限られたコアなメンバーが広報などを行いつつ、構想はコアなメンバーに様々な者を加えて検討していき、月日を重ねるごとに規模を拡大していけばいい。
- センターについては、作品を作る人がいて、持っている人がいて、売買行為があり、どこで活用し、展示して研究してアーカイブをもつのか、批評評価をし、どう広報するのかという一連の流れのマッチング事業をできるセンターが必要である。

ウ. 中核的施設の設立資金の獲得

- 日本人の感覚的にチャリティーは、むいていない気もするが、かなり明確な使用用途を決め、かつ、ある程度作家に還元することができれば、継続的に作家も参加してくれるのではないか。

短中期目標について

ア. 収蔵庫

- 日本の美術作品を買っていかなければならないが、それを保管する場所がない。民間も安価に使用できる収蔵庫が必要で、その際、民間企業には公的な展覧会等に積極的に貸し出すこと等を条件とすれば、日本の現代美術の多様な企画が開催できるようになるのではないか。
- シンガポールにタックスフリーの大規模収蔵庫が政府の支援によりできており、個人コレクター、企業でも安価に使えるようになっている。

- 作品を収蔵する場合は、例えば、広大な土地を持つ飛行場の近くなどでもいいのではないかと。飛行場の近くに作品が収蔵されれば、貸し出時の輸送も容易になり、また、被災地の近くの飛行場を活用できれば、復興にもつながる。
- シンガポールには、セキュリティチェックもしっかりした全てが金庫のような巨大倉庫がある。修復家の部屋も併設している。国の美術館にしても収蔵庫がなく、大きな問題となっている。この問題に特化して検討する組織があってもいいのではないかと。
- 倉庫と輸送は常に問題となっていて、作品のスケールダウンが必ず起こっている。保有していくことを継続するだけで皆息切れし、なかにはコレクションをやめてしまう人もいます。

イ. 修復・美術梱包技術

- 日本の美術梱包技術と輸送技術はアジア最高であり、文化輸出や海外協力時の武器になると思う。これを技術供与すべき。それと一緒に日本の現代アートも発信できると思う。
- 日本の修復技術と梱包の能力はとても高いが、美術梱包は実施している業者において、儲からないと縮小されるという状況にある。何らかの形で、ソフトとして何処かに集約し、そこから作品を搬出入できるようにするといい。
- 若い人で美術梱包をやりたいという人は多いが、働き先が輸送会社しかない。美術梱包の専門的な職に対する位置付け、社会の評価がついていっておらず、人が育たない。
- 芸大には修復専門のコースがあるが、そういうところが梱包技術と融合することで、アジアの中の強みとなるのではないかと。シンガポールや中国は巨大な収蔵庫や大規模な美術館を作っているが、作品の扱いが雑で、こんなところに持って行って大丈夫かと思うことは多々ある。そのような時、日本の梱包技術等を海外に提供できればいいのではないかと。
- アジア美術館館長会議に出席したとき、美術梱包の専門家の養成を提案した。日本が進めてきた技術をきちんと見せるべきで、韓国の美術業者は、日本の業者に1年ほどインターンを派遣し技術を習得させている。日本の梱包技術などをもっと発信するべきである。
- 修復をする場をきちんと与える必要があると思う。個人宅のような場所で行っている人も多い。
- 現代美術の修復は、始まったばかりで、ノウハウが全くない。全くないところにノウハウを積み上げていくことで、世界のトップの技術を確立することになる。いままで手探りでやっていたことを、データ化し共有することによって、誰もま

ねできない技術をある程度まで平準化して知識として共有することができれば、それが日本の強みになると思う。

ウ. コレクターからの寄贈

- コレクターは個人の財産として作品を持っているが最終的には、寄贈することまで視野にいれている。確実に管理し、コレクションを生かしてくれる機関があれば寄贈したいと思っている。
- 寄贈を考えている側から考えると、何処の美術館・団体で、どのように保管、保存、活用されるかというのが大きな問題で、今の日本では、寄贈してもいいことが何もない。寄贈して本当に活用されるのか、そもそもどのような条件があるのかというものがわからない。収蔵庫などの話が先走っても、寄贈しやすい条件がなければ、寄贈などは行われたい。寄贈条件などもあわせて考えなければならない。
- 寄贈に対しての説明責任が必要である。選考委員が組織され、どのような基準で寄贈を受け入れるか否か等をきちんと説明できるシステムが必要である。

エ. 美術作品の収集

- フランスの FRAC (地域圏現代美術基金。Fonds regionaux d'art contemporain) は展示室を持たない地方の美術のための収蔵庫で、まとめてその作品を美術館に貸し出す作業などを FRAC が行っている。どのようなものを購入するかというのはケースバイケースだが、独自にコレクションを活用した展覧会なども行っている。
- 一方アメリカは、民間主導なので、個人コレクターと美術館のつながりが、日本とはまるで違っている。個人が美術館を支えており、システム的にも個人コレクターと美術館のつながりが強く、不正や癒着がおきかないようなシステムがきちんとしている。美術館の職員は、自ら購入するものを理事会に説明しない限り買うことができないことになっている。
- 国であれ、個人であれ、作品を残していくという戦略がある。フランス型の支援か、アメリカ型の支援かで、よく問題になるが、そもそも日本とは予算規模が違いすぎる。

オ. 国際シンポジウムの開催

- イベントをやることは重要で、それを通して、海外の様々な情報源や人とのつ

ながり等ができ、ネットワークが広がっていくことになる。

- これまでの日本の現代美術の海外での展覧会は、あくまでも海外の団体が主導的に調査し、開催してきている。日本の現代美術に関する海外での展覧会を開催することについては、まずは調査研究等を行い、数年を見越して行うべきである。その間に海外からも調査に来てもらったりして、しっかりとした規模・内容のものを行うといいと思う。
- 長期的な展望として展覧会等を行うのであれば、例えば、世界各国から日本の現代美術に興味関心のある有識者等が一堂に会する、シンポジウムやサミット等を行ってはどうか。国内外の者によって議論すること等によってネットワーク作りや情報の共有を図っていくことが必要である。
- これまで現代美術に関し小規模な意見交換の場はあったが、大規模なものはなかった。タイプの異なる研究者（もの派、具体派、中間、地方、都心）、キュレーター等呼んで特定のテーマによるシンポジウム等を行うことで、大きな宣伝アピールにもなると思う。そのような取組を通じて、展覧会をやるという下地を日本で作っていくことによって、海外でも展覧会等を開催していけることになる。日本からも作品を提供するが、海外からも必要とあれば提供をしてもらえる体制を作っていくとよいのではないか。

「論点の整理（案）」全体について

- はじまりの文章の「日本人のアイデンティティを世界が認知する」という部分は、本文の中で多様化する日本と言っているのにもかかわらず画一的に見えるので、違和感を覚える。前後に何らかの言葉を加えるべき。
- 「一緒に何かを作ろうとする考え方」と「日本のいいところを世界にという考え方」という二つの見解があるが、「日本のアイデンティティ」というとやはり閉ざされているイメージがあるので、一緒に新しい文化を作っていこう、というニュアンスに変えるべきである。